慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヘイ・ オン・ ワイと古書の町運動
Sub Title	Hay on Wye and booktown movement
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2007
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.92, (2007. 6) ,p.115(180)- 126(169)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2006年度藝文学会シンポジウム : 古書-その過去・ 現在・ 未来
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00920001-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヘイ・オン・ワイと古書の町運動

藤田　弘夫

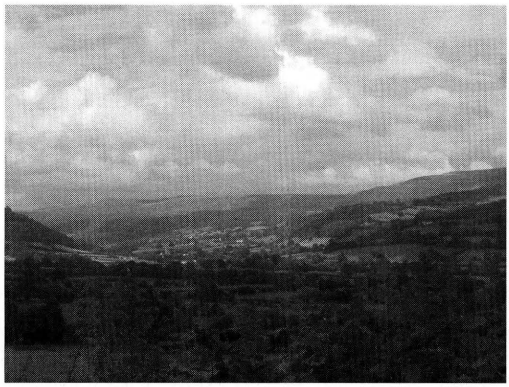
第一節　古書の町とヘイ・オン・ワイの斬新さ

神保町は世界最大の古書店街となっている。神田神保町には、160店余りの古書店が集まっている。東京には他にも早稲田大学や東京大学の周辺にも古書店が集まっているが、神保町は古書店街の代名詞となっている。外国ではロンドンのチャリングクロス、パリのカルチェラタン、北京の琉璃廠などが、有名な古書店街となっている。また、ケンブリッジやオックスフォードなど大学町にも、古書店が集まっている。古書店は大学の周辺で発達した。こうした古書店街の概念を一新したのが、ヘイ・オン・ワイの出現である。

地方の田舎で古書店が成り立つことは、従来では想像できなかった。最近でこそ、インターネットの発達で立地を選ばなくなったが、古書店は消費者のいる大都市の学校の近くに集まるものであった。ヘイ・オン・ワイは鉄道も通っていないウェールズの片田舎にある。イングランドとの国境からわずかにウェールズ側に入ったところにある。鉄道も通じていない田園地帯に古書店が集積しているのである。

ヘイの人口は1500人程度である。そこに教会が5箇所、食料品店が4軒、新聞販売所が2箇所、郵便局が1箇所ある。ヘイには厳密な意味で、100年未満の家はないといわれている。ここまではウェールズにある普通の田舎町とそれほどかわらない。しかしこの小さな集落に30軒ほどの古書店が集中し1200万冊の蔵書があるといわれている。さらに10軒のアンティーク・ショップが集まっている。また、ヘイとその近郊には、13軒のレストランと100軒ほどのパブ、ホテル、ゲストハウス、Ｂ＆Ｂがあり、その内34軒は町の中心にある。

ヘイは「古書の聖地」として、古書店を核とする観光地となっている。

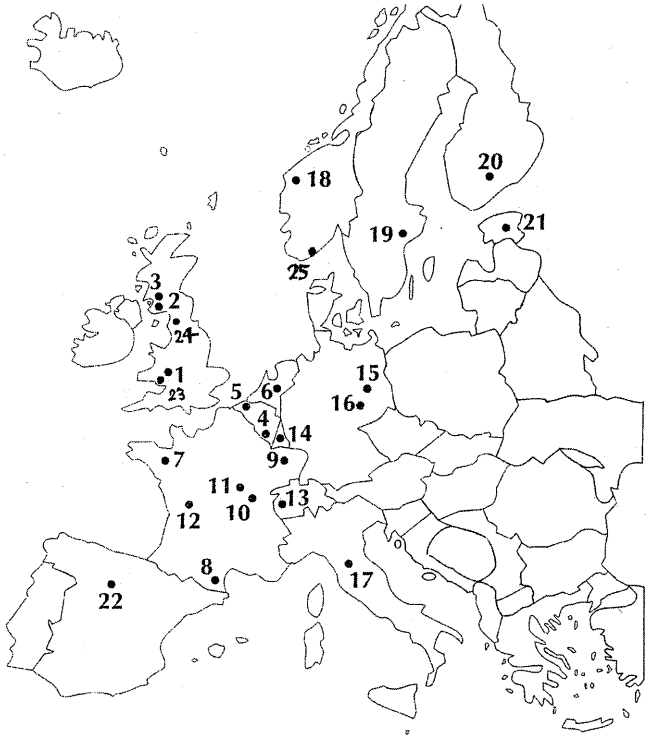


ヘイの遠景

ヘイ・キャッスルとその前で野ざらしとなっているオネスティ・ブックショップはその象徴となっている。ヘイは1年を通じて、多くの観光客でにぎわっている。現在、ヘイのツーリスト・センターはウェールズで三番目に多くの人が訪れるオフィスとなっている。フェスティバルともなると、観光客が世界各地から殺到する。『ニューヨーク・タイムズ』によると、ヘイ・フェスティバルは世界で一番大きな文学祭となっている。フェスティバルの期間中、『ガーディアン』紙などが後援した作家の朗読会、サイン会、コンサートなどが開かれる。

ヘイの古書による町づくりは世界中の注目を浴びることとなった。1980年代の後半以降ヘイをモデルに多くの古書による町が作られている。1990年代の後半には、ヨーロッパの各地で古書の町づくりが行なわれるようになる。現在、ヨーロッパの主な古書の町を地図に落とすと次ページのようになる。

古書の町づくりはヨーロッパからさらに北アメリカ、東南アジア、東アジア、オーストラリアへと広がっている。インターナショナル・ブックタウン・ネットワークも形成されている。ブックタウンによる町づくりは世界に40箇所以上あるといわれている。そのモデルを提供しているのが、ヘイである。では、古書の町ヘイ・オン・ワイはどのようにして形成されたのであろうか。



ヨーロッパの古書の町の分布

1. ヘイ・オン・ワイ（Hay-on-Wye） 2. ウィグタウン（Wigtown） 3. ダルメリントン（Dalmellington） 4. ルデュ（Redu） 5. ダム（Damme） 6. ブレデフォールト（Bredevoort） 7. ベシュレル（Becherel） 8. モントリィユ（Montolieu） 9. フォントノワ・ラ・ジュート（Fontenoy-la-Joûte） 10. キュイズリー（Cuisery） 11. ラ・シャリテ・シュール・ロワール（La Charite-sur-Loire） 12. モンモリヨン（Montmorillon） 13. サン・ピエール・ド・クラージュ（Saint-Pierre-de-Clages） 14. ヴィアンダン（Vianden） 15. ビュンスドルフ（Wünsdorf） 16. ミュールベック（Mühlbeck） 17. モンテッレッジョ（Montereggio） 18. フジェランド（Fjaerland） 19. メレサ（Mellösa） 20. シスメ（Sysmä） 21. ベティクレベ（Vötikvere） 22. ヴァリャドリッド（Valladlid） 23. ブライナヴォン（Blaenavon） 24. セドバー（Sedbergh） 25. トベデストラン（Tvedestrand）

第二節　ブックタウンとしてのヘイ・オン・ワイの歴史

ヘイ・オン・ワイは1500人の人口の過半数がディーヴィス姓であるといわれている。一般に、古書店街というと、歴史的な土壌の上に発展したイメージが強い。しかしヘイ・オン・ワイの古書店街は1960年代以降にできた新しいものである。さらに古書店街が、リチャード・ブースという強烈な個性をもつ一人の人間のリーダーシップではじめられたことが、大きな特徴となっている。

ブースの家の祖先はこの周辺の出身であった。リチャードの両親はヘイにあった伯父の屋敷を買い戻しヘイに移り住むようになった。少年期を両親とともにこの町で過ごしている。19世紀のヘイは100軒以上の店が軒を連ねて、ブレコンとの間に鉄道もあり1日4往復していた。しかし20世紀になると、ヘイは衰退への道をたどった。鉄道も廃止されてしまった。1960年代には、20世紀の初めに35軒あったパブが11軒に減っていた。その後、1960年代のヘイはウェールズのどこにでもある田舎のジリ貧の市場町だった。わずかに地元のチーズ、バター、卵などを売る土曜市の開催でにぎわう程度であった。

リチャード・ブースはオックスフォード大学卒業後、ヘイにやってきた。しかしかれは「大きなところで小さな役をこなすより、小さなところで大きな役を果たしたい」とする希望をもっていた。ブースは14歳のときから古書店に通うことを趣味としていたが、特別の古書好きというわけでもなかったようである。ブースは1962年にヘイで旧消防署を700ポンドで購入し、そこで古書店とアンティーク・ショップを開業する。1960年代の有名なインドのダンサー、ラムゴーパルの遺品を丸ごと購入する。高価なものはサザビーズやクリスティーズで売るが、残りをロンドンで展示会をひらくのではなく、ヘイ・オン・ワイの宣伝のためヘイで販売している。ブースはその後、店を2軒、3軒と増やしていった。

ブースはヘイの人間を知るようになると、古書店に関心をもった住民に古書店経営のノウハウを提供し、街の各地で古書店を開かせた。ブースは

ウェールズ、イングランド、スコットランドはもちろんヨーロッパ大陸やアメリカに積極的に出かけて書籍を仕入れた。その際、かれはヘイ・オン・ワイをブックタウンとして積極的に宣伝する。ヘイは1960年代の後半から次第にブックタウンとして知られるようになる。ヘイは通称、ウェールズ・マーチとかウェールズ・ボーダーラインなどと呼ばれるウェールズの停滞した地方の何の変哲もないひとつの町だったが、古書店でよみがえるようになる。

ロンドンの古籍商の悩みは在庫管理である。ヘイはとても古本の需要があるとは思えなかったが、在庫のスペースの問題は解決されていた。ブースの古書店が話題となると他の書籍商もヘイに移り住んで来るようになった。ブースはグリン・アルバン・ロバーツという観光局の優秀な広報担当者と協力して、ヘイを古本の町としてマスコミに盛んに宣伝する。すると、まもなく各国の新聞や雑誌が取り上げるようになった。かれは観光局と良い関係を築いていった。

ブースは1971年に、ヘイの中心に立地するヘイ城を1万ポンドで購入する。ヘイでは古書店の開業が相次ぐとともに古書店の集まる町として知られるようになる。ヘイはウェールズの片田舎にある古書の町として、観光客が押し寄せたのである。ヘイは1976年、国からアメリカの建国200年を祝うために、5万ポンドを受け取る。祝賀会のプログラムは観光局とブースにまかされた。しかしその後、ブースはヘイのあり方をめぐって、観光局と対立するようになる。かれは「ウェールズ観光局を廃止せよ」とする冊子まで発行した。さらに、ブースは何かとかれの考えに対立する町を非難するようになる。

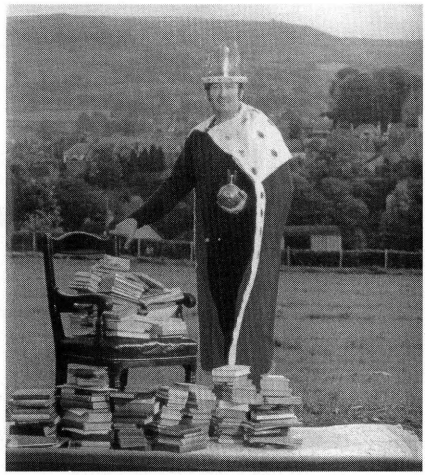
しかし何といっても、ブースが住民を驚かせたのが、ヘイのイギリスからの独立準備であった。ヘイ議会は、議会がリチャード・ブースの唱える独立宣言にまったく関与していないこと、また、今後も関与する意思が無いことを表明する。ブースは1977年4月1日を期してヘイの独立を宣言する。かれは書籍王として、友人、知人を公爵、子爵、騎士などに任命した。ヘイの住民は独立騒ぎに非難ごうごうとなった。独立騒ぎは新聞、ラジオ、

ヘイ・キャッスル

テレビなどマスコミに取りあげられ、大きな話題となった。かれはこれを世界に宣伝する好機とばかり、ヘイのヨーロッパ経済共同体（EEC）からの脱退も宣言した。

この年には、日本のテレビ局がヘイに取材でやってきている。兼高ローズ（兼高かおる）を、リーダーとする旅行番組であった。ブースは彼女を東京ローズと呼び公爵に任命する。日本の人気番組が放映されたこともあり、ヘイで日本人観光客を見かけるようになる。ブースは1977年、失火で中世以来のヘイ城の大部分を焼失させている。かれは1979年には、兼高ローズから番組25周年を記念して、東京に招待されている。かれは神田神保町、丸善に行くが、東京を歩いていると黒い頭の人ばかりが目立ったと印象を語っている。

ブースは話題づくりにはこと欠かなかった。ブースは1983年に、総選挙に出馬するが、落選する。またかれの書店は放漫経営から破産宣告をうける。しかし古書の街づくりは、さらに大きな注目を浴びるようになる。1984年元ジャーナリストのノエル・アンスロー（Noël Anselot）からベルギー南部のアルデンヌ高原にあるルデュの村を、第二の「古書の町」にする相談を受ける。ブースは全面的に協力を約束する。ブースの事業が行き詰まる一方で、ヘイの他の書店の経営は順調であった。ブースは1989年にヘイ議会に出馬する。しかし100票もとれず落選している。かれはその

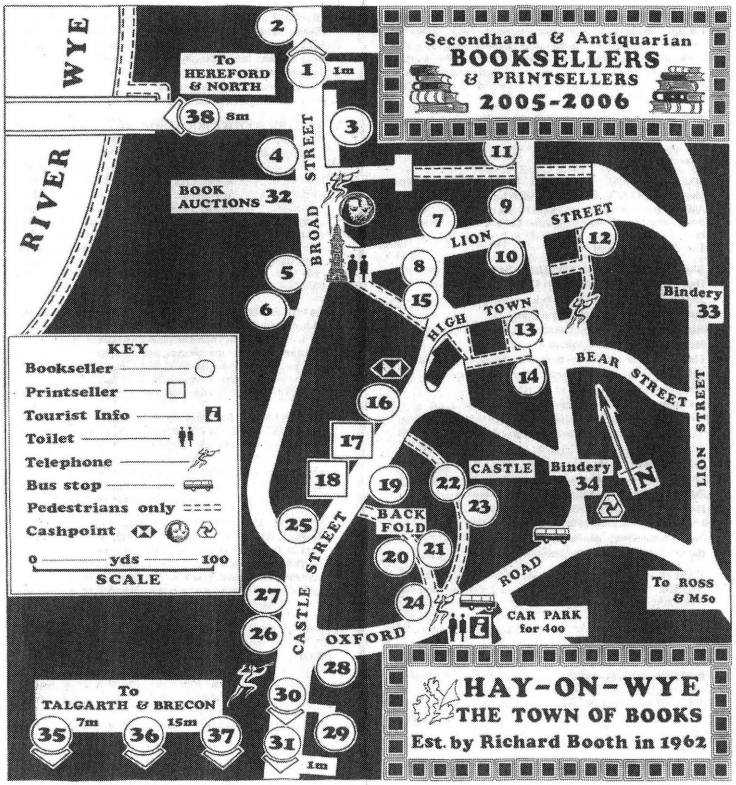


本の王様・リチャード・ブース

ことをまた宣伝した。ブースは1998年4月4日に、皇帝に就任する。王政は帝政となる。

ブースはヘイで古書店を開業し活性化の契機を与えたけれども、住民との間に軋轢が絶えなかった。かれは話題が豊富で、話していると面白い人物である。しかしかれはエキセントリックな性格で、大言壮語して責任をとらないと思われるようになっていた。その性格は、かれの商売にも表われていた。かれはまず古書を手当たり次第に仕入れるが、販売のことまで考えていない。このため何度か破産している。ヘイ・キャッスルやヘイ・シネマも展開したが、資金繰りが悪化し、フランシス・エドワード書店にヘイ・シネマを売却せざるを得なくなる。フランシス・エドワード書店は稀覯本を扱い、ヘイのなかでもっとも有名な店となっている。

では、ヘイの古書店街は現在、どのような立地状況なのだろうか。ヘイで古書店業に直接従事している人は、100人程度である。ヘイの町中には31軒の古書店がある。次ページの図の1番から31番までである。32番から34番はカタログ販売・オークション・製本店などである。35番から38番はブレコンやヘレフォードなど近隣の都市の書店である。38の書店を具体的に見てみよう。



図－2

1）チルドレン書店。すべての分野の児童図書が15,000冊以上揃っている。2）ベッティ＆カール書店。養蜂に関する資料をあつかっている。3）オックスフォード書店。すべての分野の良書を扱う。4）ブロード・ストリート・ブックセンター。軍事・スポーツから音楽・料理まですべての分野をあつかう16の部門がある。ハンコック＆モンクス書店は音楽に関する書籍とCD、楽譜、フィルムをあつかっている。5）ローズ書店。心理学や人間関係の書籍を扱う。6）アウトカスト書店。貴重な本や子どもの本で挿絵のある本をあつかう。7）リチャード・ブース書店。ファザードが目立った青い色の柱で飾られている。書店の前に世界最大の書店と書いてある。地上2階、地下1階。常時、あらゆる分野の40万冊以上の本がある。8）ダヴィッドリー書店。貴重な古書、地図、雑誌をあつかっている。9）アディマン書店。2001年にガーディアン紙で書庫の整理と従業員の親切な態度がほめられた。また、多数の書籍を購入している。10）マーダー＆メイヘム書店。探偵小説、犯罪、ホラー小説などをあつかって

いる。11）ポエットリー書店。詩集、批評、伝記をあつかってる。12）ライオンストリート書店。雑誌、ポスター、写真などさまざまな資料をあつかっている。13）マークウエストウッド書店。大型の古典書、学術書を扱っている。14）ケストレル書店＆ギャラリー。文学と美術書をあつかっている。15）ザ・ブックショップ。あらゆる分野の本10万冊がある。16）ヘイ・オン・ワイ・ブックセラー。新刊書も半分以下の値段であつかっている。17）モストリーマップ・コム。イギリスや外国の地図、地形図、植生図などをあつかっている。18）ワイ・ギャラリー。サイン本や初版本をあつかっている。19）アディマン・アネックス。古書評論紙で、有名なブックタウンの真珠と称えられた。20）チルドレン書店No. 2。児童書をあつかっている。21）グリーンウェイズ・コーナー書店。広い分野の書籍を12,000冊所蔵している。22）ヘイ・キャッスル。建築、映画、アメリカインディアンについての古書、古写真、古地図を収集している。23）キャッスル・ドライブ書店。あらゆる種類の現代の良書を保有。24）バックフォード書店。20世紀文学など広範にあつかう。ウェールズに関する本も多い。25）ブックエンズ。1ポンド以下の本を多く持っている。26）ボーズ書店。ディケンズの作品と19世紀の本。全集本。美装の書籍。27）トムズレコード・ショプ。CDとくにジャズ、ロック、ケルト音楽は充実している。28）C. アーデン書店。自然史、ガーデニング、植物、鳥類、魚類などの分野をあつかう。29）ヘイ・シネマ書店。子供の本、スポーツ、社会科学、歴史、哲学、言語、経済、健康、宗教、自然史の本まであらゆる分野の書籍20万冊がある。2階の一部がフランシス・エドワーズ書店となっており、貴重書1万冊がある。30）HCBホールセール。卸売、返品、在庫　過剰在庫本をあつかう。31）ヘイ・オン・ワイ書店。卸売、返品、在庫　過剰在庫本をあつかう。32）イ・ゲリ・オークション。33）ヘイ・バインダーズ。製本店。34）ブラック・マウンテンズ・バインダリー。古書の製本。修理。35）ストランド・ブックショップ。ヘイから7マイル離れたタルガースにある。朝食、昼食、アフターヌーン・ティの場所もある。36）アンドリュー・モートン書店。ヘイから15マイル離れたブレコンにある。10万冊以上の蔵書をもつ。37）ブックユニット。ブレコンにある。釣り、スポーツ、登山、料理。38）ニューストランド書店。ヘイから8マイルのヘレフォードにある。3万冊の蔵書があり地図、切手、葉書などをあつかっている。

第三節　古書のまちと観光化

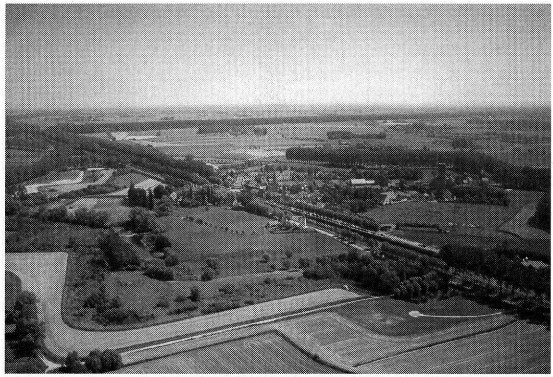
ヘイは戦後イギリスでもっとも成功したツーリズムのひとつといわれている。とくに多くの外国人ツーリストをひきつけている。しかもヘイはウェールズのツーリスト機関や中部ウェールズ開発機構の援助をほとんど得ないで、やってのけたのである。さらにヘイは　それをテレビ、ラジオ

など主要な商業メディアにお金をかけないで達成している。

ヘイは観光学者のシートン（A. V. Seaton）によると、サステナブルな農村ツーリズムの素晴らしいモデルとなっているという。それには、消防署、映画館など既存施設を利用したこと。農村部はリスクが低いし安いこと。インフラ費用が安く環境への負荷が低いこと。ツーリストの増大にすばやく駐車場を拡大したこと。ヘイは外部資本を呼び込むことより、内発的発展を重視したことなどが指摘されている。古書の町はアンティーク・ショップ、レストラン、B＆B、それに関連したサービス、写真、版画店、色彩工芸など新しい産業を生み出した。

ブースがヘイで古書の町づくりをはじめて、1984年にルデュが第二のブックタウンになるまで、約20年間かかっている。古書の町は1990年までに、ベシュレル、モントリィユの4つに増えた。その後、ヨーロッパ、アメリカ、アジアで古書の町は次々と生み出されていった。書籍には言語の違いによる大きな制約がある。その点、音楽はこれを簡単に越えられる。古書は新刊書よりもインターナショナルな世界となっているが、言語の違いが大きなバリアとなっている。書籍が言語による限界を越える方法として、翻訳、写真集、コミック化などがある。しかし翻訳には大きな経済的負担がかかる。そこで、フランスは言葉の限界をコミックで超えようとしている。南部の都市ツールーズでは、6軒の古書店のうち5軒がコミックを扱っている。ノルウェーのブックタウンでは、スカンディナヴィア諸語の本しか扱っていなかったが、最近は取り扱う本の言語を増やしている。

古書の町はブックタウンである以上に、観光の町である。書籍の販売から得られる利益はわずかでしかない。ブックタウンにある書籍の値段は一般に安いし、一度に大量の本の購入がなされるわけでもない。これに対して、ツーリストがレストランやホテルなどに使うお金は書籍の購入に使われる費用よりはるかに大きい。もちろん、ブースは彼一流の日本人が、英語の本の価値がわからないからと皮肉をいいながらも、日本の大学を相手にかなりの利益を上げたと書いている。ヘイ・シネマのクームズによると、日本人はアジア人でありながら、西洋の文化に関する書籍に興味をもつめ



ベルギーの古書の町ダムの遠景

ずらしい存在で顧客となっているという。しかしヘイ・シネマのような大規模な書店はブックタウンではむしろ例外である。

古書は過去30年間で、人口1500人の田舎町をもっとも有名な町にした。しかしその経済を活性化しているのは実は、ツーリズムなのである。しかし町は一般にカウンティの観光開発とは対立する立場をとることが多い。何かとブースと対立する町の人たちも、大企業のヘイへの進出を阻止するという点では、共通のスタンスをとっている。ブックタウンは経済的には古書の町である以上に、観光の町なのである。

参考文献

◇ Booth, Richard & Lucia Stuart, *My Kingdom of Books*, Y Lolfa Cyf., Talybont Ceredigion 1999.（東眞理子抄訳『本の国の王様』創元社　2002年）

◇ *Booktowns in Europe*, 2004-2005

◇ Collins, Paul, *Six Pence House: Lost in a Town of Books*, Carlisle & Company L.L.C., 2003. N. Y.（中尾真理訳『古書の聖地』晶文社　2005年）

◇ Clarke, Kate, *Book of Hay*, Hay Books, 1991.

◇ Clarke, Kate, *The Book of Hay*, Logaston Press, 2000.

◇ Hohl, A., Tisdell, C., Peripheral tourism: development and management, *Annals of Tourism Research*, Vol.22, No.3, 1995, pp.535-552

◇ Portzline, Larry, *Bookstore Tourism: The Book Addict's Guide To Planning &*

Promoting Bookstore Road Trips For Bibliophiles & Other Bookshop Junkies, Bookshop Junkies Press, Harrisburg,' PA, 2004.

◇ 井上繁『都市づくりの発想』丸善新書　1996年

◇ Seaton, A. V., Hay on Wye, the mouse that roared:book town and rural tourism, *Tourism Manegement*, Vol.17, No.5, 1996, pp.379-382

◇ Seaton, A. V., Book Town as Tourism Development in Peripheral Areas, *Internsational Journal of Tourism Research*. No.1, 1999.

◇ *Second & Antiquarion Booksellers and Printsellers, 1992-1993, 2006-2007*

◇ *The Gardian, 28.05.2005*

◇ *The Observer, 29.May.2005*

◇ Wanhill, S, Peripheral area tourism, A European perspective, Progress, *Tourism and Hospitality Research* , Vol.3 No.1, 1997.